● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 7
2011.10

「チャンスは不意にやって来る」

国際関係学部 事務局次長
坂本 新一

あの時，あの本を読んでいなければ，文章を書いて自己表現をしよう，などとは思い立たなかったであろう。チャンスは前ぶれもなくやって来る。予期していない分，衝撃度も大きい。

その本の名は『蜜の味』，作者は梶山季之（かじやまとしゆき）であった。

梶山季之は昭和５年，京城生まれ。広島高等師範学校（現・広島大）卒。週刊明星や週刊文春のトップ屋をスタートに，昭和37年『黒の試走車』で作家デビュー。たちまち流行作家となる。昭和50年，取材先の香港で客死。享年45才。作家の長者番付で一位になったこともある。他の作品に『赤いダイヤ』『悪人志願』，デビ夫人がモデルの『生贄（いけにえ）』等がある。あらゆる分野を取材対象とした娯楽作品を書いた。稀代の無頼派作家と言えるであろう。

私が29才の時。昭和51年の正月休みに，京都旅行に行った時のこと。東京駅の新幹線のホームで「カッパ・ブックス」の単行本を買った。車中で読むためである。タイトルは『蜜の味』。通俗的な官能小説のようであった。作者は梶山季之である。時間つぶしの軽い読み物として買ったのだ。

意外に面白かった。夢中で読み耽った。しかし，アッと言う間もなく，一話が完結。肩透かしを喰らった気持ちである。短編小説集とは知らず，一冊の長編と思って買ったからだ。

▲ 単行本『蜜の味』

その時，閃（ひらめ）いた。

（そうか！文章は長くなくても良いのだ）

（自分で短編小説でも書けないか？書いてみようかな！）

と思い立ったのである。何故か？

ひょんな事から大卒職員採用試験を受け，合格。専任職員にはなったものの，約５年。学生時代の専攻（芸術・音楽学科，ヴァイオリン専攻）のマグマをずうーっと封印してしまっていたからである。その葛藤をどう処理したら良いか？　何か代替の表現手段は無いものか？と考えあぐねていた時だった。

楽器演奏（私はギターも弾く）をするには，練習時間，仲間，練習場所及び発表場所が必要である。装備や手間がかからず，一人で出来る芸術表現は「原稿書き」ではないか，と私はその時考えたのだ。（後になって，それは大きな間違いであったと気が付いた。そんな簡単なものではなかったからだ）

さて，その京都旅行でのこと。梶山季之のその小説本に触発され，京都に着いてからは神社，仏閣見学を辞め，市内の書店を回り，梶山作品を買い集めた。

『赤いダイヤ』『夜の配当』等，昼間街中をブラブラしながら買っては読み，買っては読み漁った。夜は気分転換に，京阪電車で大阪へ行き，ミナミにある演芸場で漫才他を観賞した。

東京に帰ってからも梶山作品を読みまくった。読み続けて行く内に，テーマが軟派の官能小説のみならず，硬派の分野にまで，多岐にわたっている（例：ノンフィクション『日本の内幕』）ことに気が付いた。

梶山作品に夢中になり，それが高じて梶山作品評を，日本大学新聞に投稿しようと思い立ち，当時市ヶ谷，河田町にあった，梶山氏の豪邸に取材で訪ね，美那江夫人に色々と，お話を聞かせて頂いた事もある。（その頃から，現在まで美那江夫人とはお付合いさせて頂き資料等も送ってもらっている）

「下手の横好き」が，その気になったのである。

その後，参加自由な同人誌を捜して投稿したり，職員でありながら，入学試験を受けて法学部・新聞学科（二部）に学士入学して勉強したりもした。

次頁に続く▶

▲ 商学部の『砧通信』

昭和57年に世田谷，砧にある商学部に異動，同図書館の広報誌「砧通信」と出会う。図書館員として勤務している時に，同誌に銀座の夜の風景を描いた「銀座の花売り娘」を発表。評判と悪評の挟み撃ちとなる。

しかし，その作品を読んだ地元，砧の「そば屋」のご主人から，組合発行の機関紙「日本そば新聞」に，客員ライターとして，寄稿してくれないか，と依頼が来た。そこには平成３年～５年まで，月刊連載で22回分のエッセイ（世俗・風俗・大衆食がテーマ）を書いた。

そうこうする内に，図書館の友人が『銀座のサムライ』（岡野イネ子著，文化社）という本を見せてくれた。私はその著者の経営する銀座のバー「龍（りゅう）」を訪ねて，押しかけ弟子となる。私が師事した初めての師匠であった。（岡野先生は俳人でもあり，元，東宝の女優。店の常連客にはコラムニストの青木雨彦が居た）

岡野先生の添削は厳しかったが，授業料はお店のカウンターで，水割りの杯を重ねるだけで良かった。

「坂本さん，貴方，面白い話をたくさん拾ってくるけどさ，そのまま書いたってだめよ。嘘も少し，誇張も少し，嫌味にならないように，よ」と教えてくれた。

ところで，私が芸術学部の４年生の時，日大紛争が勃発した。三崎町の経済学部，法学部で狼煙を上げた闘争が，昭和43年の６月中旬，江古田の芸術学部にも飛び火した。芸闘委（芸術学部闘争委員会）により，校舎はバリケード封鎖され，授業は翌年の２月まで中断となる。

私は闘争には直接，参加はしなかった。中で何が起きているのか？皆目様子が分らなかったからである。

その後，千葉の館山にある芸術学部のセミナー・ハウスで疎開授業も行われたし，ロック・アウトが解除されると，授業も再開された。私には専門科目を含め，単位が取れていない科目が多くあった。

大学側は急遽，詰め込み授業で４年生に単位を取らせ，卒業させようと考えた。（例：フランス語を３日間の集中講義で教えた）

このドサクサ（言い方は悪いが）で私は単位を全部取り，卒業することは出来た。しかし，半年以上も授業がなかったのだから，４年間，充分勉強した，という達成感はなかった。トコロ天の押し出しのような形である。卒業式も行われたが，私は出る気もせず，後で教務課へ出向き，卒業証書を受け取った。砂を噛むような気分であった。

気持ちの整理もつかないままであったが，恩師から，

「荒れた学校を立て直すのと，それに実習助手をやってくれないか？」

という依頼があった。冒頭に述べたとおり，２年間の臨時雇いの後，大卒職員採用試験を受けたのである。

現在でも，そのときの選択が正しかったのか？と考える時もある。が，タイム・マシンに乗って過去に戻る訳にもいかない。

時代はいつも激動である。その中で若者は悶え苦しみながら，社会に挑戦して行く。自分の技能や人格を磨いて行くには，それ相当の，言わば一生を懸けての勉強をして行かねばならない。

本との出会い，友人，恩師等のような人々との出会いが，個々人の人生に影響を与えて行く。

「知」の泉である図書館にも，また，図書館以外の外の世界にも，情報が溢れている。アンテナを精一杯めぐらせて，思う存分行動してほしい，と思います。自分の人生を左右するようなチャンスや本に（＆恋にも），必ずめぐり会えると信じます。

P. S.

つい最近，新刊書の『大森実伝』（毎日新聞社刊）を買った。大森実はベトナム戦争当時，毎日新聞の外信部長。北ベトナムのハノイ・レポートで名を成したが，当時の駐日，ライシャワー大使の反感を買い，辞任に追い込まれた。彼はまた，作家の大宅壮一が主催する「大宅考察組」の一員でもあった。

中国の文化大革命（1966～1976）の最中，大宅考察組は大宅壮一が団長となり，大森実，藤原弘達，梶山季之等の野武士集団を引き連れて中国を訪問した。政治も社会もマスコミ人も「熱き心」の時代であった。

▲ 商学部勤務当時の筆者

ESSAY

これからの図書館

国際総合政策学科　杉山　嘉尚

現代社会の情報技術の進歩はめざましいものである。それにともない図書館をめぐる情勢や環境は社会の進展とともに変わってくるだろう。

1つは，図書館における雑誌等の電子化である。従来の印刷された雑誌が続々と電子ジャーナル化され，そして図書館での電子機器を通しての講読が主流となりつつある。そのことは図書館の雑誌の購入に取って代わることになるだろう。

2つは，図書館の蔵書図書のデジタル情報化である。全国の図書館と相互利用が進む。利用者はパソコンで日本全国，さらには世界の図書館と文献検索により入手困難な文献の情報を手に入れることができる。日本国内においては全国の図書館にアクセス，1週間前後で図書が手元に届く相互利用も進んでいる。

電子ジャーナル，全国の図書館と相互利用，その他ネットワーク利用による情報の検索，確保ができる。これからの図書館は蔵書の冊数を重ねることが知的なる図書館の主たる役割ではなくなるのではないか。とくに社会科学において図書館での文献検索は，多様な方法で，社会の最新の情勢情報，研究，そして今後の社会的展開などの文献が重要でもあり，専門誌，論文，情報などが社会状況の把握につながり，今後のあるべき社会の構築に役立ってくる。

さらにこれからは，携帯電話，スマートフォン，タブレット（iPadなど）の利用で読めるデジタル本，雑誌などを直接図書館ネットワークから手にすることになるのでは。

とはいえ，まだまだ多いアナログ人間は，図書を実際に手にして，自らの手でページをめくり，時にはチェックの赤線や付箋紙を入れたいのである。

また，社会科学では，街中が図書館になる。1枚のパンフレットやチラシ，目に付く看板，車内の吊るし広告や各種の広告などは，すべて社会情報である。そして立寄る本屋，カフェ・居酒屋での人々の振る舞いや観察は楽しい，多くの関心を与えてくれる。

しかし他方では，図書館は，静寂な空間であり，学生の勉強する環境でもある。わが図書館もゼミの学生が良く利用している。演習課題，授業の予習，復習，宿題，レポート作り，あるいは時間つぶしの読書のために，ゼミ生の誰かが図書館にいる。呼び出しの連絡がすぐにつく。学生の一番の心地よい環境が図書館であることがうれしい。友人が勉強する姿を見ることも刺激で，気を引締め，そして勉強に対するやる気を起こす適度の緊張感と知的空間を自分のものにしている。これも図書館である。

ESSAY

図書館ラクダから思うこと

商経学科　松井　洋子

今年も産経児童出版大賞の選考委員として昨年出版された児童書を読む機会に恵まれた。弁護士の小西先生と私は「社会部門」を担当している。昨年が国民読書年であった事から図書館をテーマにした図書に注目した。その中の『図書館ラクダがやってくる』（マーグリート・ルアーズ著　斉藤規訳　さ・え・ら書房）は図書館の大切さを再認識させてくれる本として社会部門から推薦した一冊である。

本書では世界13カ国の移動図書館が，紹介されている。ラクダ，ゾウ，ロバ，バス，船，列車，手押し車，自転車の助けを借りて，人が大変な労力，時間をかけて，情熱を本と一緒に運んでいる。単に図書を提供するだけではなく，識字教育の一端としても移動図書館が存在している。この本の題名にもなっている「図書館ラクダ」はケニアの人里離れた砂漠の村に住む子供たちに本を運ぶ二頭のラクダのことで，なんとラクダ一頭で200キロ，500冊の本を運ぶという。その他にパプア・ニューギニアのジャングルの奥地にある村まで4時間かけて本を背負って歩く人達や，津波被害にあったインドネシアではバイク図書館が活躍し，本の読み聞かせをする「おはなしきゃらばんさん」の存在等も紹介されている。

なぜ移動図書館に熱い気持ちが注がれるのか。それは本を待っている人達がいるからだろう。フィンランドでは離島まで船で本を届けている。へき地に住む人々にとってそれは待ち遠しいイベントとなっていて，そこに届いた本を手にしている子供たちの笑顔が移動図書館に関わる人々にとっての力とかエネルギーになっている。アゼルバイジャンの難民キャンプでは移動図書と移動図書館の存在は空気や水と同じくらいに大切なものであると語る図書館員の言葉や，避暑地で移動図書館の活動をしているイングランドの図書館員が「図書館は建物ではなくサービス」と語っていることから，図書館の意義と役割を感じることができる。世界にはこれほどに切実に本や物語を求めている子供たち，人々がいるのだ。

残念ながら，この本は大賞には選ばれなかったが，この本に紹介された精神は，東日本大震災の被災地の方々のために生かされているのではないだろうか。学校の図書館という建物は避難所に変わったが，消えてしまった図書は人がけん命に運び続けている。どうか，本が着くのを楽しみに待つ心と，本を手にするときの笑顔を持っていてほしい。そして今，ここで「本を読む」ことは「自分が人間である」ことをみんなでもう一度思い起こしたい。

● WRITTEN BOOKS 刊行物紹介

『日本巨人伝　山田顕義』

佐藤　三武朗 著［講談社］

最初，本の題名を『明治の貴公子 山田顕義』とした。しかし，映画監督に原稿を手渡した時，「日本の巨人」となり，さらに講談社の手により「日本巨人伝」となった。本の執筆で苦労したのは，明治の三傑であり，恩人でもある西郷隆盛を西南戦争で，学祖が討つ場面である。西郷隆盛を国家の礎（いしずえ）と認めつつも，落涙（らくるい）の中で，城山に籠もる西郷を，学祖は攻める。学祖は，明治22年，日本法律学校（日本大学の前身）を創設する。西洋を学びつつも，日本には日本の風土，歴史・文化・情操に根ざした法律が必要であり，法律の実務家の養成が急務であると考えた。「日本」を冠した法律学校は，それまで藩ごとにバラバラであった法律を統一し，日本が法治国家であることを世界に誇ることを目指した。民法，商法を編纂した人こそ学祖であり，その努力が実を結び，明治44年に不平等条約が改正されるに至ったのである。『日本巨人伝　山田顕義』の映画化が決定した。多くの人々の熱き思いがあっての決定である。

『イノベーションと流通構造の国際的変化
業態開発戦略，商品開発戦略から情報化戦略への転換』

蓼沼　智行 著［時潮社］

現在，我国の流通は再編の時を迎えつつある。流通のグローバル化，情報化が同時進行する中で伝統的流通システムの見直しが迫られ，それらが流通の国際的変化を促そうとしている。こうした状況下，本書は，経済構造，制度の変化と融合化について流通業の国際的な構造変化に焦点を当て，イノベーションと構造変化の発展過程とその特質の解明を進めて，情報技術革新と世界システムの変容との関係を明らかにしていくことを意図している。

また，本書の特徴は，世界経済，世界システムというマクロのフレームワークのなかで現在の流通業の構造変化を位置付け，その変容を情報技術革新，特に，情報ネットワーク化の急速な進展の影響を軸に解明しようとすることにある。加えて，そのフレームワークにおける情報化と流通業の構造変化を解明していく前段階として，まず，情報通信技術の発展段階と世界市場の変容の関係を4区分の市場環境変容モデルを用いて検討し，現在の情報化と市場環境の構造的変化の位置付けを図っている。さらに，日米におけるイノベーションと流通構造の発展過程とその特質の解明を進め，情報技術革新と流通構造の国際的変革，その影響を広範な視点から明らかにしている。

『教員養成のしくみとインターンシップ
教員の実践的指導力形成のために』

永塚　史孝 著［啓明出版］

現在，教員はひろく私立・国立・公立の大学で開放制免許制度のもと養成されている。教員養成大学・学部ではない大学においても，それぞれの専門性を基礎に教員免許を取得でき，多様性と専門性をもついろいろな型の教員が養成されている。その養成における課題は，時代や社会の変容に影響を受ける。

本書は，こうした観点から，現代の教員養成のしくみを概観するとともに，教員に求められる資質や能力，技術を教職課程のなかでいかに養成すべきか，とくに現在より求められる実践的指導力について，インターンシップの活用や体験活動に注目し，その有効性を実際の私立大学と付属中学校の事例を参考に提言，考究している。

『親密化のコミュニケーション』

西田　司，寺尾　順子 著［北樹出版］

「メッセージ」は言語と非言語でできている。しかし「メッセージ」におけるインパクトの比率は同じではなく，全体を100％とすると，言語7％＋声の調子38％＋顔の表情55％である。これが有名なUCLAのアルバート・マレービアン教授の示した式である。言語と非言語の比率で言えば7：93と圧倒的な差が明らかとなり，非言語の重要さを印象づけた研究となった。このマレービアンの時代から30年程経ち，注目テーマは「相互理解」になった。そこで本書は初対面のコミュニケーション能力を，動機と知識とスキルの3つに分け提示した。この能力は社会が学生に求める，経済産業省のいう「社会人基礎力」や文部科学省の「学士力」でもある。本書で詳細に解説しているこれらコミュニケーション能力を習得して，友人関係を築くために生かしたり，就職戦線勝ち抜きに活用したりと，社会での活躍準備に必携の1冊。

『南米日系人と多文化共生
移民100年…その子孫たちと現代社会への提言』

福井　千鶴 著［沖縄観光速報社］

1990年，日本の入国管理法が改正され，日系人の活動（就労）に制限のない滞在が容易にできるようになり，多くの南米日系人が出稼ぎ目的で来日するようになった。特に，日系人の多いブラジル，ペルーからの来日が多く，就労先のある地方都市に集住し多くの問題が発生するようになった。

本書は，南米から来日した労働を目的とした日系人だけを見て，それが南米日系人の全ての姿でないことを知っていただくことと，現地の日系人社会，日本人移住地の様相や課題の理解，日本における「多文化共生・より良い共生社会づくり」の推進に寄与することを狙いとしている。取材で得た写真を多用し，現代の南米移住地や出稼ぎ日系人の様相に触れ，様々な課題とその解決策について提言し，特に，他に類を見ない現代の南米諸国の日系人や移住地の様相を著した本ともいえる。

『異文化結婚を生きる
日本とインドネシア/文化の接触・変容・再創造』

吉田　正紀 著［新泉社］

いわゆる「国際結婚」はこれまで国籍の異なる人たちの結婚とみなされてきたが，実際は言語，民族，宗教，階層，人種など互いの文化が異なるという意味で，本書では「異文化結婚」とよぶ。男女の出会いと恋愛は，身体的・性的魅力や異質なもの，望ましい職業や好ましい性格に関心が向かい，国籍や言語，民族，宗教，階層，人種などの違いは飛び越えてしまうが，いったん結婚すると，日常の言葉づかい，食習慣，宗教信仰，親子や親族との関わり方，社会的・経済的地位，居住の習慣など，日常生活のあらゆる側面で異質なものに直面する。

著者は長らく文化と民族の交流の在り方に関心をもってきたインドネシアを対象に，インドネシア人と日本人の異文化結婚生活に焦点をあてる。異文化結婚が，互いの文化をどう受け入れ，互いの相違をどのように調整しているのかを知ることができる格好の場であると著者は考えるからである。異文化との出会いが増大し，多文化共生が叫ばれる今日，異文化の理解や異文化交流の在り方を考える際に，異文化結婚の営みから学ぶことが多いと考えられる。

所蔵資料紹介

ドイツ語に翻訳された歌舞伎『寺子屋』『朝顔日記』(1900)

図書館長　田中　徳一

今年は日独交流150周年に当たり，国際機関資料室主催の日・EUフレンドシップウィークにおいてもドイツをテーマとして展示会を開催した。今回はその際に展示された図書館所蔵の貴重書の一冊，カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）によるドイツ語訳『日本の劇―寺子屋と朝顔』（1900）を紹介したい。訳者のドイツ人カール・フローレンツは，明治22年（1889）に来日してから25年間，帝国大学及び東京帝国大学でドイツ語・ドイツ文学を講じ，比較言語学も担当した。その間，また帰国後も日本の古典文学の研究に従事したことにより，近代的日本学の草分けとして知られる。

当館所蔵のドイツ語書籍『日本の劇―寺子屋と朝顔』は扉に“Japanische Dramen. Terakoya und Asagao übertragen von Prof. Dr. Karl Florenz. C.F.Amelangs Verlag, Leipzig. T.Hasegawa, Tokyo”と，原題，訳者名と共に日独の出版社名が記されているが，日本語の奥付には，明治33年（1900）9月10日，長谷川商店の発行とあり，長谷川武次郎が外国人向けに制作した，一連の縮緬（ちりめんぼん）本の一冊であることがわかる（縮緬本は，文字と挿絵を印刷した和紙を，さらにクレープ加工して綴じた和装本）。所蔵本が初版であることは，扉に版数が記されていないことと，奥付の発行年月日から判断できる。

この書籍には前半に，竹田出雲・並木千柳・三好松洛・竹田小出雲合作『菅原伝授手習鑑（すがわらでんじゅてならいかがみ）』から「寺子屋」の段を独訳した『寺子屋あるいは田舎塾 ― 一幕の歴史悲劇』（Terakoya oder die Dorfschule. Historisches Trauerspiel. In einem Akt），後半には山田案山子作『生写朝顔日記（しょうつしあさがおにっき）』から「宿屋」と「大井川」の段を独訳した『朝顔 ― 一幕の浪漫劇』（Asagao. Ein Romantisches Schauspiel. In einem Akt）が収められている。いずれも人形浄瑠璃及び歌舞伎の名作であり，片や主君に対する忠義のために我が子を犠牲にする悲劇，片や愛し合う若い男女が運命のために擦れ違うメロドラマである。所蔵本は保存状態も良く，縮緬和紙に主要場面の色鮮やかな挿絵が描かれ，絹織物のように美しい。絵師の名は記されていないが，やはり当館で所蔵するフランス語版（1900，『寺子屋』のみ収録）と同じ挿絵であり，新井芳宗の手になるものであろう。ドイツ語版は好評を博し，七版まで数えた。

ところで，日本の古典劇として西洋で最初に有名になったのは，このフローレンツによるドイツ語訳『寺子屋』だった。歴史的に重要な位置を占める当作品に関して若干言及しておきたい。忠誠心から我が子を身代わりとする劇の主題と共に，千代の子別れ，松王による小太郎の首実検，千代と源蔵との立ち回り，菅丞相の歌での松王の再登場，松王夫婦による小太郎の野辺送り等の主要場面も，原作そのままである。しかし原作に忠実な逐語訳ではなく，細部を省略する一方，原作にない台詞や脇筋を添えた，翻案に近い自由訳である。訳者が前書に記している通り，義太夫の語りは大部分，人物の台詞に取り込むか，ト書に書きかえられている。武士が格調高く台詞を交わすところは五脚のイアンボス（弱強格）詩句で，そうでないところ（子供，兵士，百姓等が登場する場面）は散文で綴られている。西洋人の受容や美的感覚に配慮したアレンジメントと言うべきであろう。

後に『寺子屋』の西洋各国語訳が現われたが，日本語原典からの直接訳ではなく，このフローレンツのドイツ語訳からの重訳だった。例えばポーランド語訳（1904，出版1907），ロシア語訳（1909），英語訳（1916）では，原作にないフローレンツの創意工夫がそのまま踏襲されている。特にポーランド語公演（1904，ルヴフ）と英語公演（1916，ニューヨーク）が大きな成功を収めたが，それは台本が原作の趣旨を生かし，かつ西洋人の受容に配慮したフローレンツのドイツ語訳を下敷にしていたせいかもしれない。それに対して，ドイツ語圏ではフローレンツ訳による上演は確認されておらず，この訳を種本に，原作の意図から逸れたドイツ語翻案劇がいくつも作られて上演されたのは，皮肉というほかない。

興味深いのは，英語訳の『寺子屋』がさらに和訳されて日本へ逆輸入され，昭和4年（1929）に，大阪で歌舞伎の阪東寿三郎により，また同年，東京で新劇の友田恭助により上演されて話題を呼んだことだ。当時の資料を見ると，上演台本が依拠した英語訳が，フローレンツのドイツ語訳からの重訳であったとは，誰も知る由もなかったようである。

▲ ドイツ語訳『日本の劇―寺子屋と朝顔』
（左：『寺子屋』の部巻頭／右：表紙）

推薦図書紹介 ● RECOMMENDED BOOKS

国際総合政策学科推薦図書

『「科学技術大国」中国の真実』

伊佐　進一 著［講談社］

陳　文挙

「経済指標や軍事力が現時点における国力を評価するものであるとすれば，科学技術力は10年後，20年後の国力を左右するものである。」と伊佐進一さんの新書の中に書かれてある。この本は決して理科系の著書ではなく，10年，20年先の中国の科学技術の発展動向，そして経済の発展や軍事力の変化を予測し，今後の日中関係をどう見ていけばよいかについてよく書かれたものだと思われる。現在の中国は科学技術力が国家戦略として推進されている。しかし，中国の経済発展は資源環境問題や軍事力の拡大を引き起こし，周辺諸国の不安を招いており，また，中国科学技術力の向上も日本にさまざまな影響を与えている。著者は諸君たちと同じく将来の中国に対して不安な気持ちをもっている。その不安を払しょくするため，著者はこれまでの３年間で中国各地を歩き回ってみた。彼が中国科学技術の現場から得た結論は国際総合政策・国際教養を専攻する諸君にとって大変参考になるものだと私は思っており，この本を推薦する。彼の結論は何であろうかと思うなら，ぜひ本の中を探してみてください。

国際教養学科推薦図書

『人はなぜ逃げおくれるのか―災害の心理学』

広瀬　弘忠 著［集英社］

伊坂　裕子

私たちは，3月11日に東日本大震災という未曾有の災害を経験した。人は，地震，津波，台風などの災害にあったとき，どのように行動するだろうか？　危険を避けるために，すばやく避難するのだろうか？　一般的には，災害に巻き込まれたとき，多くの人が我先にと避難し，パニックに陥ると信じられている。本書は，そのような古い災害観に警鐘を鳴らす。

災害時にはパニックが起きることはまれであるというのが，災害研究の専門家の常識である。むしろ，危険が迫っているのに，それを実感せず，避難などの行動を起こさない。そこには，危険を実感しないこころの働きがある。これは，日常生活を営む上では適応的であるが，災害時には避難を遅らせ，被害を大きくする要因となる。本書で解説されているのは，そのようなこころの働きである。

さらに，本書では災害の衝撃を受けた後に，社会と個人の心がたどる変化の諸相や，災害現場で働く人たちのメンタルヘルスなど，災害心理学が研究対象としていることを取り上げている。多くの事例を紹介しながら，わかりやすく解説した良書である。東日本大震災を経験した今こそ読んでほしい一冊。

国際関係学科推薦図書

『「対テロ戦争」の時代の平和構築―過去からの視点、未来への展望』

黒木　英充 編［東信堂］

安藤　貴世

2001年９月11日に発生した米国同時多発テロ以降，国際社会はアメリカを中心とした「対テロ戦争」を展開してきた。ただ，「テロとの闘い」は決して新しいものではなく，更に「テロとの闘い」という名のもとに，悲惨な虐殺を伴う様々な政治的暴力がこれまでに発生してきた。本書はそうした政治的暴力の極限的な姿である「ジェノサイド」について，ボスニア，カンボジア，ルワンダなどの例を挙げて考察することを通し，そこから「逆に」平和構築への道を展望することを試みるものである。また，ジェノサイドの原因としては宗教的・民族的対立の存在が指摘されることが多いが，その背景には国際関係をめぐる当事国以外の各国の政治的思惑や国益などが複雑に絡み合っていること，場合によってはメディアが問題を増幅させることがあり得るという点も指摘されている。折しも9.11からちょうど10年目を迎える本年５月に，アメリカ軍によるビンラディン殺害というニュースが世界を駆け巡ったが，果たして今後「対テロ戦争」がどのような方向に向かって進んでいくのかを考える上でも大いに手がかりとなる一冊である。

国際文化学科推薦図書

『アサー家と激動のインド近現代史』

森　茂子 著［彩流社］

加藤　洋子

バブル崩壊以降の日本にとって，近年のインド経済の急成長はまぶしいほどだ。日本との経済関係も深まり，日本の人々がインドを理解する必要性がこれまでになく高まっている。

本書が何よりも貴重なのは，世界銀行や（インド駐在代表を勤めていた）アジア開発銀行での著者の豊富な国際経験である。また，著者は，インド人の学者を夫とし，その家族や友人たちとも幅広い交流を重ねてきた。妻として，そして国際官僚としての目を通して書かれた本書は，他に例のない厚みをもっている。

著者は，なぜ1990年代以降，インド経済が発展し，息を吹き返したのかを問う。その経済発展を縦軸として，横軸には，紡績業界で成功したお祖父さま，ヒンドゥー教に支えられたお義母さま，運転手，民営化大臣など，さまざまなインドの人々の苦悩と喜びが描かれている。この縦軸と横軸が織りなすなかで浮かび上がるインドの経済発展の光と影―ムンバイやプーネといった都市での急成長とその矛盾も描かれ，文章も美しい。

著者は，1999年から2006年まで本学部で教鞭をとり，また，本学部とインドの大学との交流を始められた。

国際交流学科推薦図書

『ことばを鍛えるイギリスの学校 ― 国語教育で何ができるか』

山本　麻子 著［岩波書店］

安藤　栄子

この本は，３人の息子たちがイギリスのナーサリーから大学を卒業するまでどのような言語教育及び学校教育を受けてきたのか，研究者であり，母親でもある著者がそれらをつぶさに観察し，考察したものである。イギリスには「話すことによって学ぶ」，「話すことが思考を発展させる」という確固たる信念がある。これは，「口は災いの元」，「言わぬが花」や「自分を抑えて自己主張はしない」とする，つまり「人の話を聞く」ということを第一に教えるわが国の教育理念とは真っ向から対立するものである。このような学校教育，言語教育についての考え方の違いはどのように捉えたらよいのだろうか。学生のみなさんにはぜひ本書を読んで考えてもらいたい。そして教育改革が叫ばれているわが国では，思考力を育てる国語教育，言語教育はどのようなものが望ましいのか，考えるきっかけとなれば幸いである。

国際ビジネス情報学科推薦図書

『ものづくり経営学―製造業を超える生産思想』

藤本　隆宏 著［光文社］

川口　智彦

学際的研究とは，ある問題を複数の学問領域の視点から研究することにより，何か新しい「知（アイディア）」を創造しようとする研究である。本書で取り扱う「ものづくり学」も「文理融合で取り組む」学際的な学問であり，その取り組みを通じて日本の産業がこれから進むべき道の姿を描こうとしている。

著者の藤本隆宏は，東京大学ものづくり経営研究センター所長で，日本における「ものづくり学」の第一人者である。本書は，文庫本サイズの分厚い本であるが，各章が10ページ程度で完結しており非常に読みやすいうえ，一読すれば，「ものづくり学」が一通り学べるような構成になっている。また，製造業における「ものづくり」だけではなく，「開かれたものづくり」という観点からサービス業についてもふれ，今や世界の製造センターとなったアジア諸国の「ものづくり」についても書かれている。

学際的な研究とは，まさにこういうものだと実感させられる一冊である。

商経学科推薦図書

『広告心理』

仁科　貞文，田中　洋，丸岡　吉人 著［電通］

雨宮　史卓

広告は時代を映し出す鏡であると表現する人がいる。しかしそれは，学校や職場でテレビCMやそのコピーが話題になるという単純なことを意味するわけではない。広告は常に人々の願望や欲求と共に存在し，トレンドの変化と共にその姿を変革させている。

例えば日本市場のモノだけを見ても，かつての三種の神器以降，経済成長や人々の欲求の上昇に合わせて様々なブームが沸き起こって来た。平成の時代になってからは，カーナビ，パソコン，携帯電話を平成三種の神器と呼ぶ人さえいる。これらの商品は昔で言えば，特撮やアニメの中のヒーローが使用する架空のモノであった。それが，現実となり必需品になりつつある。

さらに近年は，モノから心へ，つまりモノがもたらす豊さが飽和して，気分や経験，理想の人のライフスタイルさえも人々の欲求の対象である。その意味でも，広告は人々の夢や欲するものを創造するコミュニケーション活動であると言える。

本書は，「広告心理」として15年ごとに改訂され，45年の歴史を持つ古典になりつつある。普段，何気なくテレビCMを見ている学生諸君は，広告に携わる人々が，どのように消費者を広告という武器によって魅了したかという歴史や今の戦略を知り，違った角度から広告媒体を捉える事が出来ると思われる。

食物栄養学科推薦図書

『ハプスブルク家の食卓―饗宴のメニューと伝説のスイーツ』

関田　淳子 著［新人物往来社］

三橋　富子

ホーフブルク宮殿内の王宮銀器博物館を訪れた時，展示されている銀器や陶磁器の美しさとその膨大な量に圧倒され，これらを使って食事をしていたハプスブルク家の食卓の風景を見たいものだと思った。1273年にルドルフ一世がドイツ国王に選出されてから1918年の帝国滅亡までの約650年にも及ぶ長期間，なぜハプスブルク家が栄華を極めていられたのか？運と結婚政策だけで皇帝の冠をかぶっていられるわけはなく，この一族の栄華を可能にした一要素に「食」もかかわっているのではないかという視点から書かれている。歴代皇帝やその家族の食嗜好だけでなく，各種食材や料理の伝来経緯，食事作法や供食形式の変遷なども含めた食文化史，およびその時代の政治，社会，経済情勢なども伝わってくる。個人的には，女帝マリア・テレジアと皇妃エリザベートに興味を惹かれた。マリア・テレジアは神聖ローマ帝国皇帝でありながら16人の子供を産み育てた。その活力の源は特製オリオスープであり，精進日にも肉を食べていたからだそうである。姑との葛藤から生涯を終りなき旅で過ごした「ヨーロッパ宮廷随一の美しい皇妃」は，美しさを保持するために大好きなスイーツを食べながらダイエットを続けるために異常な食生活をしており，医師たちからの警告もガンとして受け入れなかったということである。

STUDENT'S VOICE

新たな発見の宝庫・図書館

国際関係学科　4年　石井　利幸

私にとって図書館とは，いつも新たな発見に満ち，好奇心旺盛になれる場所です。

図書館には，それぞれの人にあった楽しみ方・その人にしか分からない独自の楽しみ方があると思います。そこで，今回は私の図書館の楽しみ方について紹介します。

まず始めに，新聞，本や雑誌をとにかく読んでみて，新たな情報を自分から見つけ，楽しみを見出すことです。新聞は，社会人にとって必須アイテムと言われるほど重要な存在です。私は出来るだけ毎日，新聞を読むようにしています。日本の主要新聞の他にアメリカ，韓国や中国などの新聞もあります。第二外国語の語学学習に役立てることもできます。日本の新聞と海外の新聞との違いについて見るだけでもおもしろいです。新聞以外にも本や雑誌もたくさんあります。図書館１階にはパソコンがあり，蔵書検索が出来るので自分の興味がある分野についての本や雑誌を検索してみてください。何気なく手に取った本が思いの外おもしろく，新たな発見が多く見つかるはずです。勉強などで疲れた時には，雑誌で気分転換できます。学術系の雑誌だけでなく，大衆向け雑誌もあるのでカフェにいる感覚で読むことができます。しかし，図書館内は飲食厳禁なのでくれぐれも気を付けてください。

二つ目に，図書館を有効的に活用することで世界各国について知識が深められます。この「世界について知る」ことが私なりの図書館の楽しみであり，それが一番の楽しみ方だと感じています。図書館３階には，国際機関資料室があり，主に欧州連合（EU）に加盟している国々についての情報が手に入ります。そこには，国連寄託図書館という日本に14カ所しか設置されていない貴重な場所があります。国連ドキュメントや公式記録を見ることも出来るので有効的に活用してみてください。また，国際協力プラザも併設されているので，国際協力に少しでも興味のある方は気軽に何度でも足を運んでみてください。司書の方々は，みんな接し易く，話し易いので分からないことがあったら気軽に相談に乗ってくれます。図書館の２階には，旅行のガイドブックが日本国内だけでなく世界の地域ごとにあります。個別に仕切られた机があるので，何冊か気になった国のガイドブックを手に取り，勉強ついでにぱらぱら読んでみてください。世界の国々について知り，その国に実際に行ってその国の空気（雰囲気）を感じてくるのも大学生ならではの勉強方法だと思います。夏休みや春休みなどの長期休暇期間中の旅行計画を立てる際にも図書館が大いに役立ちます。

図書館をいかに有効的に利用できるかで大学生活の充実度が変わってくると大学４年生になった今，改めて実感しています。大学生活の中で図書館での自分なりの過ごし方・楽しみ方を見つけ，皆さんのためにある図書館を最大限に利用してみてください。

国際機関資料室から　INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2011
「ドイツを知ろう！～日独交流150周年を記念して～」開催

EU情報センターを設置している国際機関資料室では，毎年５月９日のヨーロッパデーを記念して，日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は，５月９日(月)から５月31日(火)まで，図書館１階閲覧室及び国際機関資料室内にて，「ドイツを知ろう！～日独交流150周年を記念して～」というテーマで展示会を開催しました。

今年は日本とドイツが修好通商条約締結150周年に当たることから，ドイツに焦点をあて，ドイツの基礎知識や文化などを紹介しました。１階閲覧室では，図書館長の田中徳一教授によるドイツ歌舞伎『勘平の死』と『寺子屋』の研究をまとめたものをパネル展示し，来場者の関心を集めました。また，当館の貴重書であるドイツ語版「寺子屋」のちりめん本や研究の関連書，日独交流150周年記念切手なども展示しました。

▲ドイツ歌舞伎展示パネル

２階の国際機関資料室では，ドイツ政府観光局や大使館から送付されたポスターや資料を展示。食文化やクリスマスなど独自の文化を紹介しました。また，教職員や学生が実際にドイツに旅行した際の写真も多数展示し，旅行者の視点でドイツをとらえることができました。

▲ 国際機関資料室の様子

恒例のクイズでは，エコバッグやUSBなどのEUグッズを景品としました。

また，今年は，新聞記事やラジオ放送の効果が一般の来場者増加に繋がりました。停電もおさまり通常開館に戻り，図書館でこの展示会を開催することができ，多くの皆様にEUやドイツに触れていただく機会となりました。

日本大学国際関係学部図書館報
BIBLIOTHECA
第７号
通巻第152号
発　行　日／2011年10月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/